

C PK等の酵素、クレアチン排泄量はA群、B群差は認められなかった。C P KはA群、B群共病勢進行と共に低値を示す傾向にあった。障害度の推移はA群平均0.88, B群 0.92でADLの推移はA群 11.8 ± 1.6 B群 15.8 ± 2.4 となりA群がやや病勢進行緩和の傾向を示した。しかしながらこの差は推計学的には有意の差とは認め難かった。(図2)

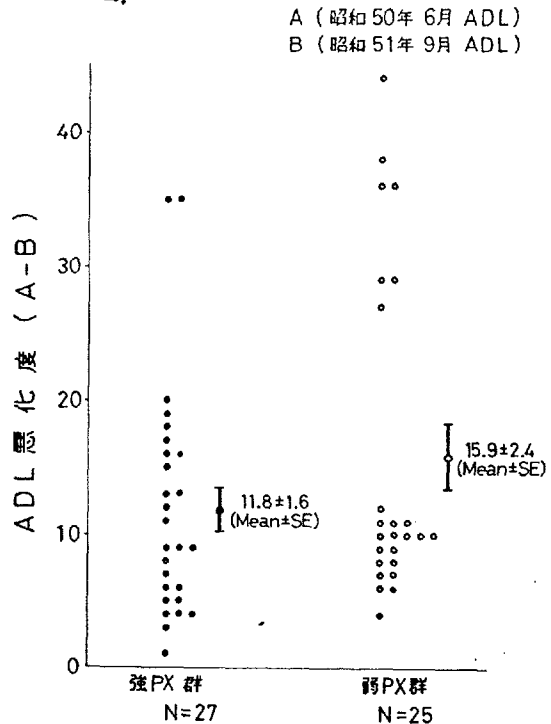
< 結 語 >

(1)隣エキスは筋ジスマウスの生存日数を有意に延長した。その機序は筋蛋白合成可能によると考えられる。

(2)人DMPの1年3ヶ月の投与実験ではA群がB群に比しやや病勢進行の緩和の傾向が認められたが推計学的には有意でなかった。今後力価の上昇及び投与期間によっては効果も期待されると推定した。

(3)今後は治療前のHuman counterによるbody potassiwnを測定しているので今後のそれと比較し効果判定のIndexとし検討する。

図2. ADL 推移



22) 筋ジストロフィー症に対する Co-enzyme Q 10 投与の影響について

国立療養所川棚病院

迫 龍 二 森 一 毅 中 沢 良 夫

< 緒 言 >

Co-enzyme Q (Co-Q)はmitochondriaの電子伝達系に関与しATP生産を高めることが知られており最近DMPへの影響についての報告も敬見される。著者らはDuchenne型DMPにCo-Q10を長期投与し、この効果を臨床、生化学について検討した。

< 対象ならびに方法 >

対象は投与群、Duchenne 型DMP12名、9~17才、非投与群、Duchenne 型DMP12名10~19才。投与法は1日15mg連日投与、投与期間22ヶ月。臨床観察は厚生省班会議基準ADL、臨床検査は各種酵素を測定、特にCPK、creatine 係数を対照とした。

< 結 果 >

血清CPK (図1) は非投与群ではほぼ直線的に下降しているのに対し、投与群では6ヶ月目を peak に12名中9名においてCPKの上昇を認めた。クレアチン係数(図2)は期間中両者共ほぼ一定している。ADL (図3) は両者共ほぼ直線的に減少しており有意の差はなかった。経過表図4に示す症例は17才のDuchenne 型でCo-Q 投与後CPKはほぼ段階的に上昇し、6ヶ月目を境に減少し前値に復している。他の酵素GOT、LDHも同様の曲線を描いたがAldolaseは投与期間中わずかながら増加の傾向にあった。しかしADL scoreは投与期間中改善は認められず常に減少していた。

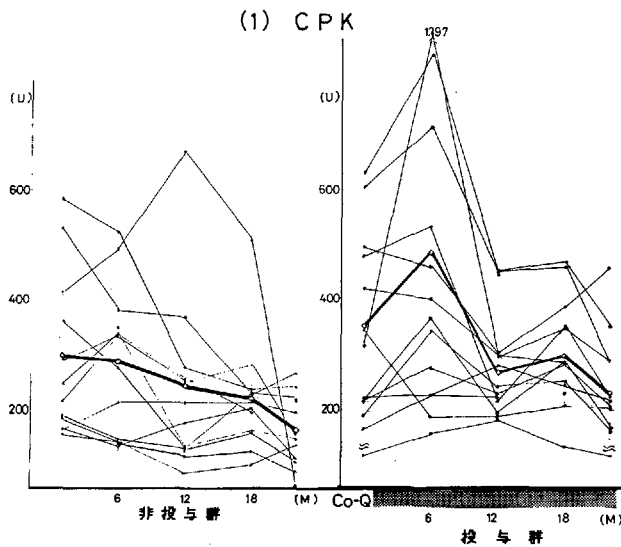


図 1

(2) Creatine 系数

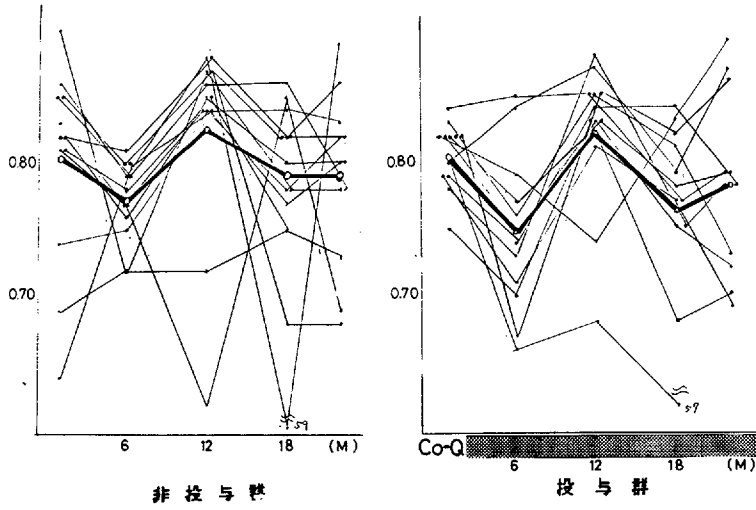


图 2

(3) ADL

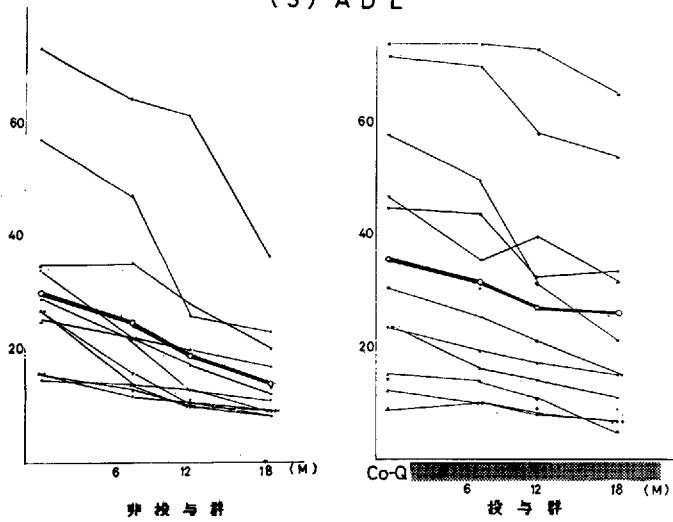


图 3

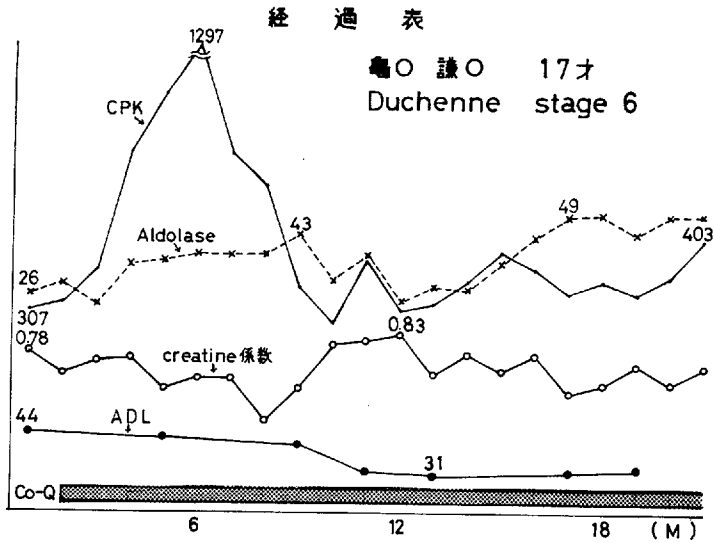


図 4

< 考 案 >

筋疾患に対する Co-Q の有効性については多くの問題がある。著者らは Duchenne 型 12 名に約 2 ケ年に渡り長期投与を行なった。症例数が限られており Control 群と比し推計学上の優位差は臨床及び酵素学的検査で認められなかったが、短期間ではあるが CPK の上昇する例が多く認められた。DMP における各種 enzyme の変動についてはすでに多くの報告があり、病勢の進行にしたがって CPK が減少していくことは著者らも認めている。今回の投与で Co-Q 投与期間中 CPK の著明な上昇を認めた症例があったことは、その有効性を判断する前に興味ある所見と思われる。臨床症状についてはこの 2 年間観察し得た範囲で、投与群、非投与群に差はなく進行しており、あらためて Duchenne 型 DMP 治療の困難さが感じられる。

< 結 語 >

Duchenne 型 DMP 12 名に Co-Q 15mg 連日投与し 22 ヶ月に渡り Control 群と比較検討した。推計学上の有意差は認めなかったが、一時的に酵素の上昇する症例を多く認めた。臨床症状の改善は認めず常に進行していた。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<緒言>

Co-enzyme Q(Co-Q)は mitochondria の電子伝達系に関与し ATP 生産を高めることが知られており最近 DMP への影響についての報告も敬見される。著者らは、Duchenne 型 DMP に Co-Q10 を長期投与し、この効果を臨床、生化学について検討した。